

インカ帝国の滅亡と病原菌

吉田 眞人

ジャレド・ダイヤモンド著『銃・病原菌・鉄』（一九九七年刊）は、ユーラシアの文明がなぜ生き残り、他の文明（南北アメリカ、オセアニア、赤道アフリカ等）を征服してきたのかについての解明を試みたものである。

一五三二年に、ピサロ率いる総勢二百人程のスペイン軍が、皇帝アタワルパのインカ軍約八万人に、如何にして勝利したかについて詳述している。

インカ軍の敗因として、鉄製の武器も銃も持たず青銅器製武器のみで対抗、敵方騎兵の馬上からの鉄器による攻撃に弱く、又、奸計により皇帝とピサロ軍が直接対峙し且つ皇帝の輿を担ぐインカ兵は武装をしていなかった、等を挙げている。併し主因として、当時既にパナマとコロンビアに進出してきたスペイン人が持ち込んだ天然痘がインカでも大流行し、相次ぐ皇帝死去による内部抗争を引き起こしていたことを指摘している。

更に、捕らわれた皇帝アタワルパの命により、膨大な黄金がスペイン軍に献上され、インカ帝国の国力が削ぎ落とされてゆく。以降散発的な抵抗はあったが、スペインの支配が固まっってゆくこととなる。

天然痘の大流行に加え、金銀鉱山での過酷な労働が強制されたこともあり、インカの人口は激減する。ダビット・クック（北米の代表的ラテンアメリカ史研究者）によれば、一五三〇年におけるペルー域内のインカ人口九百万が、一六二〇年には六十万人となってしまう。天然痘やインフルエンザ、チフス、麻疹などの欧州由来の病原菌に対し全く無防備だったインカ人、一方スペイン人は何世代にもわたるこれら病原菌との戦いで一定の免疫を獲得していたことが、明暗を分けた訳である。

さて現下のコロナ禍。SARSやMARS等の感染症に対し一定の免疫を得ている日本を含む東アジア勢に比べ、これらが流行しなかった欧米がコロナに無防備で現状の惨状になっている事は、歴史の皮肉であろうか。医学の発展により実用化されたワクチンにより、歴史は繰り返されずにすむ事を望む。